HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	グリーフケアの社会学的分析 ： 医療化モデルの限界をケアネットワークで乗り越える
Author(s)	横山, 聖美
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第17042号
Issue Date	2026-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k17042
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100095
Type	doctoral thesis
File Information	Satomi_Yokoyama_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）　　氏名：　横山　聖美

主査　特任教授　　櫻　井　義　秀

審査委員　副査　特任教授　　平　澤　和　司

副査　教　授　　宮　嶋　俊　一

学位論文題名

グリーフケアの社会学的分析―医療化モデルの限界をケアネットワークで乗り越える―

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の目的は、死別を経験した遺族への支援を医療化された個人の心理支援に留めることなく、グリーフケアを社会的関係性および地域支援構造の中で捉え直すことで、家族や地域、支援団体による緩やかなコンパッション・コミュニティを構想することにある。ここでのグリーフケアとは、悲嘆の回復を投薬やカウンセリングによって改善することだが、医療・心理職の専門的ケアに委ねることで個人と社会の医療負担を増大することは言うまでもなく、現実的に医療資源が不足する地方自治体では望めないケアのあり方である。しかも、悲嘆の様相と回復への道のりは個別的であり、地域における支援ネットワークの構造や、ジェンダー・世代といった社会的属性によっても異なり、従来の定型的な捉え方では実践的なソーシャルサポートも十分に機能しないことが明らかになっている。

著者は、20 年来、当事者としてグリーフケアの自助組織を自ら運営し、がん専門看護師の教育を担って臨床経験も積み、看護学科で准教授として看護学を教えている。上記の問題を明らかにし、実践的なグリープサポートのモデルを構築するために、6 つの個別研究を行ってきた。本研究では、①地域の民間グリーフケア支援団体の実態調査、②若年女性遺族の支援ニーズ調査、③中高年男性遺族の支援ニーズ調査、④コロナ禍での死別と悲嘆の潜在化・複雑化の事例研究、⑤がん患者の在宅看取りの事例研究、⑥中高年遺族のグリーフケア学習と講座産業の実態調査、をふまえて、公的社会保障による制度的支援の不足を補完するために自助グループを活用する市民活動の新しい動向を明らかにした。同時に当事者・医療関係者・行政・民間支援団体が相互に連関する支援ネットワークのハブとなる「中間支援組織」の役割が重要になると示唆して、地域グリーフケア支援モデルの可能性を論じている。

本研究の学術的貢献は三点にまとめられる。

第一に、6 つの個別調査研究を通して、医療化モデルを単に否定するのではなく、①どのような側面のグリーフケアが医療化によって「理解可能」になってきたのか、②他方で、どのような実践や経験が医療化モデルの枠外に置かれてきたのか、を明らかにしたことである。①では、遺族が心理的支援を得られるようになり、感情的対処行動を選択する一部の性別・世代にとっては有効な支援となったことが確認された。②では、医療・心理支援モデルには、感情的対処行動を好まない男性遺族や、悲嘆の個人的対処行動を選択する人に対しては支援ニーズのミスマッチがあり、非医療者による多様なグリーフケア実践に参加することで個人の生きがい獲得といったウェルビーイングを得ているケースを確認できた。特に、看取り士養成やグリーフケア講座については、大学のみならず民間団体も多数参画しており、そのなかには講座型ビジネスに近いものがある。グリーフケアを学びたい中高年者が受講生としてだけではなく、フランチャイズされた団体の運営に組み込まれるケースもあり、民間団体のグリーフケアにおける役割を重視するだけでなく、その脆弱な側面も明らかにしたことは研究の客観性を高めている。

第二に、地域に暮らす非専門職が担う実践的支援の実態調査を行い、筆者主催の自助グループが中間支援組織としての社会実装型研究のモデルを構築するべく、「大切な人をなくした人とサポーターのためのピアサポート MAP 北海道版第二版」を制作して行政・医療・自助グループなどに 4000 部を配付したことである。グリーフケアを含む死の臨床は、現場を熟知した医療従事者でなければ踏み込むことのできないフィールドであり、著者は自身の専門職としての経験と自助グループ運営の経験をいかんなく発揮できた。

第三に、6 つの事例研究はいずれも国内の専門学会で 11 回にわたって口頭発表され、4 つの事例研究が学会誌（『日本がん看護学会誌』、『死の臨床』、『現代社会学研究』『緩和ケア』）に査読済み論文として掲載されており、指導教員と共編著になる櫻井義秀・横山聖美編、『ウェルダイングの臨床社会学－生老病死と宗教』（法蔵館、2025 年）を刊行している。博士課程に在籍した 5 年間でここまで口頭発表や学会誌への掲載、書籍などをまとめた調査研究と学術成果の発表能力は高く評価される。

・学位授与に関する委員会の所見

本委員会では、申請者が現職を持ちながら博士課程において約 5 年にわたり、看護学から社会学へ転換して社会学の専門分野を学習し、併行して調査研究を積み重ね、博士論文の各章をなす調査研究を行い、学会で成果を問い、相応の評価を得ている状況からして、申請者が学位取得に必要な条件を満たしているとの認識に到った。

しかしながら、申請者も自覚していることだが、本論文にも課題があるために念のため記載する。

第一に、グリーフサポートの社会的側面を重点的に研究することで、グリーフが単なる喪失ではなく、近親者の「死」をどう受容し、自らの死生観を確立していくのかという心的過程を十分に描ききれなかった印象がある。但し、心的回復には認知行動療法的なやり方と生活の規律化による自然治癒的な側面があり、日常生活の回復に焦点を当てた心理療法的側面に説明を加えればよかったのではないか。

第二に、ウェルダイングやウェルビーイングへの気づきをうながす実践として看取り士やグリーフケア講座への参加を「生涯学習」として捉えたが、むしろ、自己理解や社会的役割の再構築といったおさえ方で中高年者のセカンドライフを叙述した方が実態に即していた。また、自助グループも支援者主体か当事者主体か、医療機関や行政機関とどのような関係を結ぶ組織であるのかといった点から組織の類型化も可能であり、

中間支援組織の捉え方も抽象的な組織論に留めずに具体的な側面をさらに展開することが望まれる。

これらの課題は、本博士論文の著者に今後期待する視点と研究領域を示唆するものであって、当該博士論文において瑕疵にあたるものではない。調査内容に関して、申請者は、本論文の口頭試問において審査委員からの質問にもおおむね適切に回答し、研究の達成と課題について十分に考察していることがうかがえた。

以上、本論文は、死別を経験した遺族への支援を医療化モデルから、グリーフケアを社会的関係性および地域支援構造の中で捉え直し、アラン・ケレハーのいうコンパンション都市の実現を札幌市で実装可能にするべく、実証的研究として知見を提示した学術的貢献が相応にあるものと認められ、審査委員会では全員一致で、本論文提出者に博士(人間科学)の学位を授与可能との結論に達した。